

| | |
|----------|------------------------------------------|
| 氏名 | 岡野 詩子 |
| 学位 | 博士 |
| 専門分野の名称 | 学術 |
| 学位授与番号 | 博甲第 4598号 |
| 学位授与の日付 | 平成24年3月23日 |
| 学位授与の要件 | 社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則(文部省令)第4条第1項該当) |
| 学位論文題目 | 現代史における歴史認識の共有 ーカティンの森事件を事例にー |
| 学位論文審査委員 | 主査・教授 田口 雅弘 教授 荒木 勝 准教授 吉田 浩 准教授 尾関 学 |

学位論文内容の要旨

本稿は、1940年にソ連軍によってポーランド人将校ら約22,000人が殺害されたカティンの森事件を事例とし、事件を文献から読み解くだけではなく、現代の動向そして実際に国民の声とりわけ遺族の声を分析することによって、現代史の中でその歴史認識がどう変化し、今後どう共有していくかを明らかにし、そこから事件解決の方向性を模索することを目的としている。

この事件は、発生から70年以上経つが、現代史の影の部分として未だに解決しておらず、ポーランドとロシア間における対立の原因の一つとなっている。しかしながら本研究においては、事件の真相を追い求めるのではなく、共産主義時代から体制転換後へと時代が移り変わる中で、事件が戦後の時代時代において政治的にどのように扱われてきたかに着目し、事件の現代政治・社会学的側面を分析する。また、カティンの森事件における国家レベルから国民、研究者、亡命者、遺族の様々なレベルでの歴史認識の多様性を考察し、そこから事件解決の突破口を探る。

カティンの森事件について、国家、国民、遺族がどのように考え、それをどう表明してきたかを包括的に検証できる第一次資料はない。そこで岡野氏は、次の資料を分析することによってこの課題にアプローチした。まず一つ目の資料として、戦後パリに亡命したポーランド人らによって発行された雑誌『クルトゥーラ』の全号を分析し、共産主義下での西側諸国で事件の真相がどう考えられていたかを考察した。『クルトゥーラ』は、多数ある亡命系雑誌のうち、ソ連の影響を受けない姿勢を強く示しており、唯一定期的に、また大量にポーランド国内に持ち込まれた西側の反体制雑誌である。二つ目の資料は、遺族に対するインタビュー調査であり、ポーランドでもほとんど行われていないきわめて資料性の高いものである。現地でも高く評価され、その調査と分析結果はポーランドの歴史専門誌に掲載された。この調査によって、時代の変化に伴い翻弄される遺族の姿、そして事件が政治的に黙殺され、関係者が弾圧されるか、または逆に、反口宣伝に利用されていく過程が明らかになった。三つ目は、1990年以降に全てではないが順次公開されているソ連公文書館の機密文書から、歴史事実として明らかになっている内容、未だ極秘とされている内

容を考察している。四つ目は、新聞や世論調査等などの現代性を帯びた資料から、近年の動向を整理している。

本稿は序論、5つの章からなる本論、および結論で構成されている。序論では、本研究のオリジナリティであるカティンの森事件の研究手法の2側面を挙げて、研究のフレームワークを提示している。つまり、事件の事実追究の側面だけではなく、事件が政治化していく側面に焦点に当てている。そして、それら2つの側面の関連性を念頭に置きながら、共産主義時代および体制転換後の時代における先行研究を整理している。

第1章では、カティンの森事件の概要を、最新の研究も網羅して整理している。ここでは、事件発生以前、すなわち第二次世界大戦におけるポーランド、ソ連、ドイツを取り巻く国際情勢、1990年以降に明らかにされた事実を含め、事件の詳細を独自に整理している。

第2章では、共産主義時代の西側の研究として、戦後パリに亡命したポーランド人らによって作られた雑誌『クルトゥーラ』を取り上げ、事件に関する全ての記事を分析するとともに、『クルトゥーラ』と事件との関わりも考察している。

第3章では、事件の遺族に対するインタビュー調査をもとに、遺族の目から見た時代の変化を分析している。ここでは、戦後、共産主義時代、体制転換後を通して、時代に翻弄された遺族の証言から、国際関係の中で事件が政治的に利用されてきたことを確認している。

第4章では、現代史における評価と今後の展望について論じている。近年の動向を新聞や世論調査から整理するとともに、ソ連公文書館によって公開された機密文書から、今現在、歴史事実として何が明らかになり、何が未だ明らかになっていないかを考察している。

第5章では、第4章までの分析を踏まえて、カティンの森事件の「灰色性」、つまり白黒つかずなかなか決着に至らない状況を論じ、そこから浮かび上がった解決の可能性の選択肢を探ろうと試みている。そして、国家、研究者、国民、遺族のレベルでの歴史認識はどこまで共有され、どのような溝が埋まらないのかを論じ、それぞれのレベルから見える歴史認識の重層性、およびそこから生じるニュアンスの差異を考察している。

最後に、(1)カティンの森事件がポーランドのナショナリズムの象徴の一つとなり、内政・外交の駆け引きの中でも利用されるなど、「政治の道具」として利用されてきたこと、(2)カティンの森事件に対する国家から国民に至るまでの様々なレベルでの歴史認識の相違があるが、これらの認識の違いは政治的立場が大きく影響しており、純粋な事実解明で問題が決着するわけではないこと、(3)しかしながら、全事実すなわち全機密資料公開を実現させ、それらの資料を真実としてポーランド・ロシア双方が認識することが重要であることを結論として論じている。

学位論文審査結果の要旨

審査会では、この研究が資料の限定されたテーマについて様々なアプローチを工夫しながら分析を試みている点、歴史資料として出てこない部分をオーラルヒストリーとして補った点、まだあまり分析の進んでいない最新の状況について丁寧にまとめている点などが評価された。特に事件の遺族への聞き取り調査は、世界で前例がほとんどなく、貴重な研究・分析である。一方で、研究者の見解と遺族の意見、執筆者の考えが混在している点、本稿の分析と論文の中で繰り返し使われている「歴史的解決」がどのように関係するのかという点、インタビュー分析とそれ以降の章との論理的関連性などが指摘、議論された。

また、「カティンの森事件」の洞察が、ヨーロッパ現代史の再構成にどのような影響を与えるか、人権の歴史としての視点から考察できないかなどをめぐって質問がなされた。最終的に審査会では、今後の課題がまだ残されているものの、博士論文として十分な水準に達していると判断し、全員一致で合とする結論に達した。